

人材育成とわが国の将来

中 島 成 二*



少々思い切ったことを書かせていただこうと思う。すべて私の日頃考えていることであり、私の個人的な意見であることは、ご了解いただきたい。肩書きとは無縁な独り言と見ていただきたい。

先日の日経夕刊に、学歴神話捨てきれない40代という趣旨の記事が掲載されており、私の関心を引いた。私は少々この記事とは違う観点で同様のことをずっと考えている。

学歴が何の保証にもならない、ということは、実のところ、全世界どこにいても真理である。ハーバード・ロースクールを出ても、それだけでは何の価値もない。そこからが本当の競争の始まりである。ローファームに入り、さらに自分を磨いていく。起業し、厳しい競争社会に入ってゆく。学歴に保証を求めることの方が、どうかしている。他人の学歴にお金を払う人がいるわけがない。成果に対してのみ、対価は支払われる。

世の中が対価を払うのは、やはり知力を使った活動の成果に対してである。一次生産品に対して、いろんな意味で知力が大きな付加価値を生む。農業にしても、労働生産性をいかに高めるか、という課題を未だにわが国の農業は置き去りにしている。知力の問題である。流通業、サービス産業では、より一層のことであろう。

数多くの「回避不可能」とも見える制約の中で、手順を組み、必要なリソースを確保し、結果を出すことは、まさしく知力の結晶である。一人で行える成果など高が知れている。全体をまとめ上げる力こそ、問題を把握する力、企画する力、話す力、これら知力である。「どうしたらよいか分からないが、わが社に立派な知財部門を作ってくれ。明日、××株式会社が、当社製品による彼らの特許の侵害の疑いについて、話に来たいと言っている。」教科書的にはあり得ないことが、現実の社会にはたくさんあり、100%満足できる答えではないにせよ、今ある材料の中でできる限りの解決を与えてこそ、対価はもらえる。

教育という観点では、子供たちがこういう知力のフルに必要な過酷な環境で生きていくために、適切な知育を与えられていることが最も重要である。我々の子供たちに対して、適切な知育を与えてくれるところはどこか、と問われて、消極的であれ積極的であれ、有名校進学以外の教育ルートで、我々は示して上げられるだろうか。否なら否で構わないのである。だとしたら、今のルートを、できるだけ実質化してやればよい。いくつも他のルートを作る余裕（お金と時間と人材）は、我々が小国日本には、残念ながらない。まずは保守本流を正してから、別ルートに着手せねばなるまい。

だから、結果としていわゆる「学歴」を追うように見える行動には、私は決して批判的ではない。

* エルピーダメモリ株式会社 知的財産グループ バイスプレジデント Seiji NAKASHIMA

しかし、一番大切なのは、その目標、目的である。素質に恵まれた子供たちが、適切な知育を受け、高い知力を身につけ、結果を出すようになって欲しいのである。それこそが、我々大人が、これから生きていく子供たちに身につけて欲しい「力」である。実は、キャリアのスタート地点はどこでも構わない。実際、高卒でも、いわゆる無名校卒でも、もちろん一流校卒でも、上昇志向のある人で着実にステップを重ねている人は、ほぼ間違いなく「使える」。状況を把握し、目的を理解し、自分のアウトプットの価値を最大化することができる「知力」を持っているからだ。

残念なことに、優れた知力を持つ人には自然偏りがある。我々大人が、特定の誰かに、ではなく、これからの子供たち『全体』、つまり次の世代の社会に対してしてやれることは、1. そもそも、そんなに多くない知力に恵まれた子供をできるだけ見逃さずに見つけ出し、鍛え、アウトプットが出る大人にすること、2. これら優れた子供たちが社会を支えるリーダーシップを身につけるのを助けること。つまり、できる子たちをきちんとできるようにし、社会での役割を自覚させ、次世代の優秀なエンジンになってもらうことである。出来ない子に出来ないことをやらせることは、拷問に等しい。出来ない人が抱える問題は、できる人が解決してあげなければいけない。差別とは、できないことを理由に不利益を受ける（与える）こと。今話していることは差別ではない。むしろ、リーダーシップとは、出来る子がそれを十分自覚して、出来ない子を助けてあげること。それを忘れてはいけない。それを前提に、出来る子をその子のポテンシャル一杯に伸ばしてあげるのだ。そのために、馬車馬たちに十分なインセンティブを与えること、エンジンに十分なガソリンを補給することは、社会全体にとって決してマイナスではない。我々の社会には、今も将来も、やるべき課題が山積みされているのだ。誰がそれを片付けなければいけないのか。我々？もちろん。しかし、もはや私たちの生きている時間も限られているのだ。次の世代に託さねばならない。そのための準備を、我々は次の世代にきちんとさせているだろうか。

キーワードは、リーダーシップ、であると私は思う。リーダーシップこそ、社会で役立つ知力を一言で表現したものである。問題を把握し、企画し、説得し、率いる。知力でなくしてなんであろう。組織の中のさらに小さな集まりでも、そのレベルでリーダーシップを発揮すべき人が要る。

大学は、研究機関であるが、社会としてもっと期待しているのは教育機関としての役割である。残念ながら、今の大学カリキュラムは、リーダーシップを培うものではないと言いがたい。何も自分たちで教える必要はない。そういう仕組みを学内に作ればよい。学内にすら、おく必要はないかもしれない。その場合は、入学選考において、大きく考慮するアイテムとしてリーダーシップを入れればよいのだ。それこそ、頭を使って欲しい。

しかし、学歴の象徴である大学でさえ、知力を、リーダーシップを培う仕組みとしては、影響が限定的であるのは、少し考えればすぐ分かる。これを担っている機関・省庁は、結果を出さずにもう何十年も活動が停滞していると言って良いのではないか。会社の中で同じ停滞を示せば、その組織は1～2年後には解体される。

これからの知財活動を担う人たちも、こういう優れた子供たちのプールがあってこそ生まれてくる。いま、そのプールが枯渇しかかっているのではないか。日本は、この意味で本当に危機的な状況にあると思う。学歴社会を批判するなら、学歴の本当の意味を、まず考えねばなるまい。